

. ま と め

・まとめ（覆砂効果と作漉効果の総合的評価および委員会提言）

1．覆砂効果と作漉効果の総合的評価（案）

香椎地区（御島）における覆砂効果は、底泥の粒径や有機物量でそれぞれ基準、望ましい方向を達成しており、硫化物量は一部地点で近年高くなっているがそこに生息する底生生物の種類や個体数の増加は継続している。

底泥からの溶出負荷の低減や DO 消費量の低減効果は、生物相が豊かとなったことや覆砂直後からの浮泥堆積などから現時点で持続性について明確に確認できていない。

しかしながら、生物相では底生生物の種類や個体数、湿重量が増えており、覆砂により底質やその直上の水質が改善されたと考えられ、底生生物が棲みやすい環境になったものと考えられる。

また、カレイやエイなどの底生生物を餌とする魚類も覆砂区で多く確認されており、オゴノリなどの海藻類の繁茂もみられ、食物連鎖が機能する基盤ができつつあり、覆砂により生物群集の多様化が進んでいるものと考えられる。

香椎地区（御島）における作漉効果は、香椎川河口部の滞留を解消することにより、河川水が沖に出やすく、かつ、博多湾の海水が航路上から御島海域奥へ漉筋に沿って入りやすくなっており、さらに潮汐による拡散効果の促進による流況改善が確認されている。

この効果は、覆砂による底質基盤改善とともに、流れを良くし、水深の浅い地形特性と透明度の改善などから、上記の海藻類の生育に良好な環境を与えたものと考えられる。

以上のように、香椎地区シーブルー事業における覆砂と作漉は、底質、流況を改善し、相互に改善効果をサポートしながら、海に棲む生物の生息環境を良好にし、海藻類の繁茂が可能な環境としての機能を生み出したものと考えられ、香椎地区御島海域の生物生息環境の創造に非常に有効な手法であったと考えられる。

2. 委員会提言

(素案)

なお、本調査により覆砂直後からの浮泥の堆積が明らかとなったが、覆砂や作濤の効果持続のための浮泥対策や事業効果として現れた海藻類の生育基盤の状況など、今後の事業に活かしていくため、さらに長期的な視点からのモニタリング継続等の検討が望まれる。